



発行所
 公益社団法人
 中部日本書道会北勢支部
 〒511-0018 桑名市今中町28
 平野公慎

 題字 加藤子華

一歩踏み出す発展の年に

顧問 加藤子華



るきを見出し、このような時代こそ心のよりどころとして心豊かに会員の皆さまとの親睦をはかりながら、充実した書活動を展開してまいりたいと願っています。

地域に根ざした組織作りを

支部長 平野公慎



長の地元松阪の韓天壽について詳しくお話し頂き、貴重な版木を拝見いたしました。

今年の創刊号に続き、事業報告を兼ねた第二号をお届けいたします。

七月の講演会は鬼頭翔雲理事

25年度の事業予定

展覧会	会場	四日市市文化会館
	日時	7月26日(金)～28日(日)
講演会	講師	京都教育大学名誉教授 杉村邦彦先生
	日時	7月28日(日) 15:00～
	会場	四日市市文化会館 14:30から支部集会
研修会	研修先	豊橋(筆作り)方面
	日時	11月10日(日)
講習会	26年2月実施予定	
	テーマ	「墨」
会報	第3号	26年3月発行予定

※詳細は別途案内します。
 会員外の方も参加できます。

作に不可欠の筆について学習が出来、今後の創作に活かしていきたいと思いました。

日ごろ書作に追われ、書に関する知識を得る機会の少ない私達にとって、大変有意義なものになったと思っております。

さて、公益法人に移行され一年余りを経過致しました。支部の活動においても会員外の方々も参加できるように門戸を広げてまいりました。昨年は会員外の方が二割ほど参加されており

ます。次年度は、支部展にも会員外の方や、本部に準じた若年層の方も出品できるよう条件を整えていきたいと思います。

今後とも広報活動に力を入れて、地域に根ざした組織づくりを進めてまいります。

創立から二十五年を過ぎて、会員の増減は一進一退の状況が続いております。公益化を機に更なる発展を進め新風を吹き込むために北勢地区に在住されている本部会員の方には北勢支部に所属していただくよう働きかけ、組織の拡充を図ってまいりたいと思っております。

次年度の事業計画も別記のとおり、概ね決定しております。会員の皆さまには各事業へのご参加とご協力、および一般の方々へのご鳳声を切にお願い申し上げます。

平成24年度の事業概要

支部集会・講演会

月 日 24年7月22日(日)
 会 場 四日市市文化会館
 講 師 理事長 鬼頭翔雲先生
 演 題 「韓天壽の書業・松坂というところ」
 参加者 92人
 来 賓 太田偕風 名誉顧問
 青木清涛 総務部長
 大池青岑 第一経理部長



松坂出身の韓天壽について語る鬼頭翔雲先生



展覧会の作品を見る来賓の先生方

会員展覧会

月 日 24年7月20日(金)～22日(日)
 会 場 四日市市文化会館
 出 品 本部役員 正副理事長 4点
 会員 81点
 来場者 571人

研修会

月 日 24年11月11日(日)
 研修先 京都国立博物館
 「宸翰・天皇の書
 ～御手が織りなす至高の美～」
 相国寺承天閣美術館
 「最後の文人 會津八一の世界」
 参加者 32人



講習会「筆の話」

月 日 25年2月17日(日)
 講 師 「一休園」 久保田哲暁会長
 会 場 四日市市・じばさんビル
 参加者 95人 (うち会員外32人)

新聞告知の効果もあり、会員の方も含め大勢の参加を得、また、ケーブルTV(CTY)の取材・放映あり。



水谷苔徑先生を偲ぶ

顧問 中川京童

水谷苔徑先生。あんなにお元気でしたのに……

人懐っこい面倒見のよい先生が上くなられたことが今だ覚めやらず、只々残念でなりません。皆さま方も同じ思いと存じます。

先生は大の酒豪でございました。私は反対の丸切りの下戸でございます。それでも先生は甘

辛の付き合いはうまく、私とは六十年余りのお付き合いを頂きました。

ひよっとしましたら、今頃は閻魔さんと酒を酌み交わして下界の噂話に花を咲かせてみえるかもね……

終わりにりましたが、先生のご冥福を会員一同お祈り申し上げる次第でございます。



「蟬」 22年寿展出品作

合掌

力強い書を

梅田楊華

今から三十一年前、子供の頃からやっていた書道をもう一度始めたくて実母と一緒に中日文化センターへ通うこととなり、鬼頭先生の指導を受けたのが書との関わりのはじまりでした。

結婚、子育ての時期二十年近くは通信教育でお世話になりましたが、現在は四日市の鬼頭先生の教室に通わせていただいています。作品制作に当たって、先生か



筆を持てることに感謝

津田良霍



第六十二回中日展で準大賞を頂き、喜びとともに身の引き締まる思いです。

会場で皆さまの作品を拝見して、次の作品を魅力あるものにするには根気強く書くことなのか、あるいは読める作品なのかと考えを巡らしたものです。

準大賞を胸に

荒木泉蓉



全体構成として単調にならないよう、文字の大小と行間を明るく心がけた。草稿から完成まで一年を費やし、締切りギリギリ迄紙に向かった。想いを込めて書いた。この詩文が頭から離れない中、例年の如く他の展覧会作品製作も進行した。

あの日の感動を忘れずと思う昨今、早や立春を迎える。過ぎて見れば、あっという間のようを感じる。日々試行錯誤の繰り返して古典の学書を開いても風が吹き抜けるように身につかず、それでも牛歩ながら、唯今から開始をと思っている。年を重ねて疲労も手伝ってか、やはり全力投球は出来ず、師匠、諸先生方、書友に助けられ家族の理解の上で無事筆を持つ大切な時間のあることの幸せにありがとう。感謝です。

編集後記

近くにも知らないことがありますが。「坂川陽谷」はこのほど菰野町で紹介されました。地域の話題がありましたら、お寄せ下さい。(泉石)

